

ポスト311・ローカルで懐かしい未来へ

～若い世代にできること～



講師：窪田栄一

(くぼた えいいち)

(NHK長崎放送局 専任ディレクター)

教育番組、教養番組、ドキュメンタリー、若者向け番組などを制作。ESD(持続可能な開発のための教育)の映像教材として制作し書籍化した環境教育番組シリーズ「地球データマップ」では、地球の現状を表した「データマップ」を入口に、グローバル経済が環境破壊や貧困・格差・戦争などを引き起こす「しくみ」をわかりやすく解き明かし、持続可能な社会をつくるうえでの若い世代の役割を問いかけている。2002年からは愛知県立芸術大学で非常勤講師として環境論などを教える。

■その土地に生まれ、その土地の土に帰る

最近九州長崎に移りましたので、最初に長崎の話をしたと思います。

長崎の五島列島の中央部に奈留島という島があります。過疎化と高齢化が進んでいますが、昭和30年代くらいまでは島民皆が、自給自足で暮らしていました。日本の離島はほとんど、外から船が来なくても食べていける循環型の暮らしをしていました。今でもこの島の人たちはそれに近い暮らしをしていて、半農半漁、食べるものはほぼ島で賄えます。年1回のお祭りでは互いの結束を確かめ合っています。

しかし現在では、島はお年寄りがほとんど、若い人たちは仕事がなく、仕事を求めて都会に出ていってしまいます。我々日本人は、その土地に生まれ、その土地の土に帰っていくというサイクルをずっと続け、地域の中で自給自足的に暮らしていました。それがあるときから経済と社会が発展し、

都会に人とお金が集まり、地方は過疎化して、土地と人の間のつながりや精神的安定感を失ってきたように思います。

■巡りの中を生きるという世界観

私はNHK教育テレビで「地球データマップ」という番組を手掛けていました。学校で教わるのは断片的な知識ばかりで、自分たちがどう世界の中に生きていて、これからどちらに向かえばいいのかという世界観の部分が欠けています。地に足をつけて、大きい時間の流れとこの広い世界の中で、自分はどこにいるのか、どこを目指すべきなのか、そういう羅針盤のようなものが本当の教育の役割ではないだろうかと思い、この教材がなにか助けになればと考えました。

人類は昔は狩猟採集を中心とする自給自足的な暮らしをしていて、ここは自分の世界、自分はその一部なんだという気持ちで、生まれ死んでいきました。自分のいる場所がそれぞれ世界の中心で、その周りにバランスのとれた世界がある、その巡りの環の中を自分が生きているという世界観は、世界共通、人類普遍のものです。しかしそうした世界観を伝えてきた先住民は消滅の危機にあり、こうした文化は忘れられつつあります。私たちがどうしたらもう一度大地とつながり、地球ともう一度絆を結べるのかということが、今問われていると思います。

■現代の日本で持続可能な社会を目指すために

昔のような暮らしをしていない私たちが、現代の日本でどのような世界観を持ったらいいのか。自分たちが長い歴史、広い世界の中で、どこにいるのかということ、もう一度しっかり認識することが大事だと思います。

人間がつくっている社会は、実は自然界の一部です。その中でいろいろな物事を決め、世の中を動かしていますが、

経済の格差、貧困、戦争などいろいろ歪みがあり、さらにそのしわ寄せが自然界に行って環境問題も引き起こします。持続可能な社会を目指すということは、人間界の中の歪みをなくし、自然界にしわ寄せをしないこと。そうしないと、この文明社会を続けていくことはできないのです。特に大きな問題は経済の仕組みで、このルールをみんなで改善していかないといけない。そのように考えると、いろいろと見えてくるのではないかと思います。

■懐かしい未来

地球の生命圏には太陽のエネルギーで循環がつくられ、何億年も続いてきました。ところが人間はそれと別の仕組みをつくってしまいました。これをもう一度自然界の仕組みに馴染ませるように改善していかなければならない。それが持続可能な社会を目指す基本だと思います。太陽の恵みで回っている大きい仕組みの中に自分たちがいることをもっと自覚して、子供たちにも伝えていかないとけません。昔の暮らし方に新しい知見も加えながら、持続可能で心豊かな社会のモデルをつくっていくのです。

地球は有限の惑星だというのが基本です。例えば江戸時代、鎖国で閉じられた日本列島の中で全てを循環させていた知恵から学ぶものがあるのではないかと。そう考えると、未来というのは、我々にとって懐かしいものになっていくのではないかと思うのです。

インド北部のラダックという地域にいらっしゃったヘレナ・ノーバグ・ホッジさんというスウェーデンの言語学者が、「ラダック 懐かしい未来 (Ancient Futures)」という本を書いています。ラダックは1970年代まで鎖国をしていたので西洋文明が入らず、自給自足の生活を続けてきました。彼女の著書では、我々が追い求めてきた近代化とは一体何だったのかという本質的な問いかけをしています。そして本当の豊かさや幸せとは、ある一つの世界で役割を果たし、しかもその中で循環の一部になっている、ということにあるのではないかと問題提起をしています。

■グローバル化と向き合い、ローカル化を目指す

世界では経済のグローバル化が進み、日本も国際競争力をつけようと躍起になっています。しかしその一方では世界のあちこちで、ローカル化という運動が静かに、草の根的

に起こっています。地域の中での循環を取り戻し、自立性を高めて持続可能な社会をつくらうという流れです。

グローバル化は、いろいろなものやお金が世界中を行き来するようになることです。得意な国がそれぞれ得意な物を作って貿易したり、外国の企業が自由に投資できるようにすれば、全体がより豊かになると言われてきました。でも実際は、豊かになれるのは一握りの国や企業でした。むしろ規制緩和や貿易自由化が進む中で、いろいろなマイナス面が出てきたのです。貧富の格差や都市・地方の格差が広がり、どこの地域でも中小店舗が寂れて大規模店舗が並ぶ同じような風景になってしまいました。世界中にグローバル企業が進出し、文化が均質化して、地域に根ざした産業が淘汰されてきました。持続可能な社会を目指す際には、グローバル化にどう向き合うかを考える必要があります。

3.11のとき東京では、スーパー、コンビニが皆空っぽになり、計画停電もありました。都市に住んでいると経済システムやインフラに頼らないと生きていけません、それがいかにもろいかを今回の震災は実証しました。だから震災に耐えられる強靱なインフラを、と考えるのではなく、なるべくシステムに頼らなくて生きられる方向に、と考える必要があります。震災だけでなく、経済危機や食糧不足など、いろいろな危機の可能性があるので。

皆さん、生きる上で必要なモノやコトの、何割をお金で買っているのか考えてみてください。ほぼ100%ではありませんか？しかし奈留島の人たちは、食べ物を買わないし、台風で船が来なくても生きていけることが前提ですから、インフラに依存しなくても生きていける。生きるための経済依存割合がとても低いのです。これが、持続可能性を考える上で大事なポイントだと思います。

お金を持ち贅沢できる人が「豊か」で、お金がなくて暮らしに困る人は「貧しい」と言われますが、お金がなくても幸せに生きられるというのが一番豊かなのではないのでしょうか。グローバル経済を無視はできませんが、それに頼らない部分、地域の中で自給・循環できる部分を増やしていく、それによって地域ができるだけ自立していく、そういうことが未来の持続可能な社会のモデルではないのでしょうか。食べ物だけでなくエネルギーも地域で自給し、循環させる。お金も、地域通貨などで地域内で回す。そうしたことは、草の根的に、世界各地で行われています。

■心の絆を取り戻す

持続可能な地域づくりの前段階として、地域のことを知り、何を自給・循環できるかに気づいていくプロセスが大切です。たとえば山形県戸沢村では、地元学という取り組みが行われています。子供からお年寄りまでと一緒に歩き回って「地域の宝」を再発見し、地図などにまとめる。その際に、大人が子供に「こうやって遊ぶと楽しいよ」とか、「これおいしいよ」とか教えることで世代間コミュニケーションが生まれ、子供たちは地域に愛着を持ちます。地域を見直す過程で、地域の人たちの気持ちがつながり、若い世代が地域に魅力を感じて未来の地域づくりの担い手になっていくしかけです。

この戸沢村の地元学は、調査に入った東北大学の大学院生が、村を気に入って実際に住み、自分の研究も兼ねて始めたものでした。地元の人だけでは、新しい仕組みづくりやアクションが難しいので、外から来た人が刺激を与えて、土地に根ざした人と一緒になって何かを起こしていくという地域づくりの好例ではないかと思います。

滋賀県では、県立大学の先生が中心になって、「ふるさと絵図」という取り組みを行っています。お年寄りに集まってもらって、昔の遊びや年中行事など聞き取り調査をし、その内容を整理して一枚の屏風絵に描きこみ、公民館などに飾っておくのです。その絵を前にすると、お年寄りは若い世代に「凧揚げしたんだよ」とか「魚釣りしたんだ」といったことを自然に話すので、絵が媒介になって地元学と同じような世代間コミュニケーションが生まれ、子供たちは地域の伝統の良さを再確認できます。

このように、もう一回心の絆みたいなものを、ある仕掛けをつくって取り戻すということも、持続可能な地域づくりを行いローカル化を進めるうえでの一つのアプローチだと思います。

■若い世代の地元志向の強まり

最近の調査で、将来も地元で暮らしたい学生が増えているというデータがあります。自分の生まれ育った地域への愛着や、そこを良くしていきたいという意識を、今多くの若者が持つようになってきています。かつては若者は華やかな都会に出たがるのが普通だったわけで、以前には考えられ

なかった変化だと思います。もちろん広い世界を見て井の中の蛙にならないようにすることも大切ですが、こうした変化を肯定的に捉え、上の世代がそれを生かしたり刺激を与えてあげたりすると良いと思いますし、期待もしています。

持続可能な地域づくりには、いろいろなやり方があります。日本中で、草の根的にローカル化を目指し、地域を良くしていこうということです。時間があればもう少しお話をしたかったのですが、また機会があればと思います。本日はご清聴ありがとうございました。